

都・建設予定地 生活記 (6)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕的生活記。

なにもないグジャラートにだって、観光する場所くらいはある。

階段井戸のひとつは世界遺産になっているし、ガンディー・アーシュラム（修道院）があるのもグジャラートだ。出不精の僕はまだあまり行ったことがないけれど、ガイドブックのグジャラートのページを開いてみたら、ひとつかふたつは、心ときめくものがあるはずだ。

もちろん、ガイドブックには載っていないものだって、いいものはある。

「明日、久保さんと『ピトラ画』を見に行くんだけど、一緒に行かない？」

先日、アーメダバードに住む建築家の飯田さんのお宅で貴重なノンベジをご馳走になっていたところ、こんな話になった。

ピトラ画というのはある原住民の土壁ペインティングのことだ。馬や象、鶏などが青や赤、時には銀色などのカラフルな色彩で土壁に描かれている写真は、僕も見ることがあった。あまり有名でないのは、電気も怪しい田舎の農村、その民家の中に描かれていて、辿り着くのも一苦労だから、ということもあるのだろう。そんなピトラ画を、飯田さんはもう何度も見に行っていて、明日は、僕が行かなくても弁護士の久保さんと一緒に行くという。

誘われた時、頭に浮かんだことがいくつかある。ひとつは「この機会を逃したら、ピトラ画なんて一生見られないに違いない」ということ。その次は「でも明日の最高気温、45℃だろ？」ということだった。農村に行くのだ。あぜ道のように車で入っていけないところを歩いて進んでいくんだと聞いていたのに、45℃はなかなか辛い。夏は観光の季節じゃない。

「行きましょう」

そう頷いたのは、上のふたつを天秤にかけた時、それでも見てみたいな、と思ったことに加えて、「でも45℃って今日の46℃よりマシなんだよな」という若干後ろ向きな理由と、「最近Chaloの連載、マンネリだし、もうすぐ締め切りだけど、まだ来月分書けてないし」と書くのも恥ずかしい理由があったからだ。

かくして、車をチャーターし、僕らは三人で出かけることになった。

ある雑誌に最奥と書かれた場所に、僕らは進む。アーメダバードからバローダ、バローダからチャンパネール、チャンパネールからチョーターウダイプルと進むにしたがって、だんだんと景色が乾いていくのがわかる。緑は少しずつ黄土色の荒野に変わっていく。畑

に立つトウモロコシはカラカラになって、まるでスキミたいな色をしている。日差しはいよいよ強い。外に出ると時々、地面が焼けるようなおいがする。時々道沿いに日除けの常緑樹が植えられていると、それだけでなぜか潤っていく気がするくらい、45℃は湯ききっている。

チョーターウダイプルを出た時、いよいよ周囲には何もなくなった。

「ここからは、割りと迷いながら探すよ」飯田さんは言った。

「目印とかはあるんですか？」と聞くと、「こんな風に、両側が畑になっているところのあぜ道を左に曲がる」のだと言う。

フロントガラス越しには、見渡すかぎり似たような、干からびた荒野が広がっている。

たどり着けるのだろうか。はじめて行く二人はそう思っていた気がする。

続く

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。